

子どもの自己コントロールの育ち

—日本保育学会第五十四回大会シンポジウムから—

井上 真奈

矢田 美樹子

五月に仙台で開催された日本保育学会第五十四回大会では、「子どもの自己コントロールの育ち」というテーマでシンポジウムが行われた。当日は会場が埋まってしまふほど参加者が多く、「子どもの自己コントロールの育ち」が高い関心を持たれているテーマであることが窺われた。このシンポジウムの

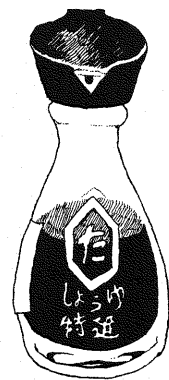
特徴は、子どもの問題性に焦点を当てただけでなく、他児や保育者との関係の中で、自己コントロールを見ていこうとするところにある。我々はこの視点に興味を持ち、実際の保育の中でそれをどう育てていくのか、具体例を通して学びたいと思い、参加した。

「子どもの自己コントロールの育ち」の

前提となるもの ―シンポジウムの報告

このシンポジウムを通して、子どもの自己コントロールとは、子どもが自分は何が大事で何を我慢できるかわかった上で、相手や状況に応じてどの程度自分を出していくか、その加減を調整する力であると捉えた。それは、保育者や親が「こうしなさい」と指示したり「これはだめ」と押さえつけて育つものではなく、子ども自身が様々な感情的経験を通して試行錯誤しながら身につけていくものである。

保育者は、子どもの①待てない②攻撃性が抑えられない③パニックを起こして立ち直れない、というような行動に出会ったときに、子どもの自己コントロールの育ちを問題視する。たとえば、自分を抑えられずぐにぶつとぶつという行為は、動作が大きく目につきやすいため、保育者はその子どもの自己コント



ロールの育ちを意識的に見ていこうとする。今回のシンポジウムでは、周りを気にして自分を出すことなく抑えてしまう子どもの自己コントロールの問題についても取りあげられた。このことが今まで余り問題視されなかったのは、ケンカなどの表立った問題が起きず保育者の目にはとまりにくいからだと考えられる。しかし、自分を抑えられない子どもも、自分を表現できない子どもも、相手や状況に応じてどの程度自分を出すか加減できない、つまり自己コントロールできないという点で同じような状態にあるといえる。今回のシンポジウムでは、このような子ども達が、自分の能動性や存在感を出し、周り

の状況に応じて自分を抑えられるようになるためには、保育者や友達とのかかわりの中で、安心して自分を出せる場と、自分をいろいろな形で表現しながら試していく機会が求められていることが強調された。(しかし、ADHD(注意欠陥多動性症候群)やアスペルガーなどの発達の障害を持つ子どもに対しては、担当の保育者一人に対応するには限界があり、園全体で対応できるように、更に必要に応じて専門機関と連携する必要がある。)

我々は、今回のシンポジウムから、子どもの自己コントロールは、「人とかかわる力」「見通す力」「自尊心」が関連して育っていくものであると捉えた。保育者が子ども一人一人の本来の姿に目を向け、「人とかかわる力」「見通す力」「自尊心」の三つを保育の中でどのように育てていくかについて、シンポジウムで述べられたことを以下にまとめていきたい。

1. 人とかかわる力を育てる

自己コントロールは、人とかかわる力が基盤となる。それは、「自分も相手も大事」にしながらかわっていく力であり、子どもの自己表現や他者理解を促していくものである。二、三歳になると子どもは自分を主張し始め、周囲の状況にも興味を持ち、いろいろな働きかけを行うようになる。しかし、言語表現が未熟で相手の気持ちを推測したり自分の意志を伝えることが十分にできないことから、子ども同士での調和的なコミュニケーションを行うことが難しい。そこで保育者が、相互交渉が円滑に進むように援助していくことが必要となる。たとえば、物の取り合いが生じた場合、保育者が、子どものことばにできない「貸してほしい」という要求や「まだ使いたい」という気持ちを汲み取り、相手に伝え、お互いが相手の気持ちに配慮できるように促し、同時に待つことや「貸して」と言うことなど

を、直接教えたりモデルとなる行動を示して伝えていく。このような経験を積み重ねていくことで、子ども達は保育者がかかわらなくても、「貸して」「まだいや」と自分の気持ちを表現し、更には相手の気持ちに気づき、「もう少ししたら貸すね」というような「相手も自分も大事」にしたかかわりを持てるようになっていく。

2. 子どもの「見通す」力を育てる

子どもは前述のような相互交渉の中で、自分の気持ちを表現したり相手の気持ちに気づくという経験を通じて、「貸してね」と言えば貸してもらえるとというような見通しを持つようになり、順番を待ったり許可を求めるなど、「自分も相手も大事」にしながら自分の欲求を満たすための方略を学んでいく。「今何をすればよいのか」と自分を客観視して考え、次の振舞いを過去の経験をもとに決定し、それ

によって得られる結果を思い浮かべることができ力、つまり「見通す」力は、子どもが自己をコントロールできるようになるための前提である。

大人は、自分の為すことを頭の中で言語化しコントロールできるが、ことばが未発達な子どもは、自分が何をしているのか、次に何をするのがまだ混沌としている。このような時期に、保育者が子どもの気持ちや行動を符号化する（ことばで表す）ことを通して、子ども自身が「現在の自分」を意識する経験と、同じような状況を繰り返していろいろな自分を試す経験を積んでいくことが、子どもの「見通す」力となり、ひいては自己コントロールの育ちにつながる。



3. 自尊感情を育てる

子どもは、自分を客観化することで、自分はこうなんだという自己概念を形成し、何が大切で何を我慢できるのかわかるようになる。自己概念の形成に伴って生まれてくる自尊感情は、自分はどう在りたいか、自分をどう出すかということなどに影響を与えるため、自尊感情を持つことが自己コントロールを育てるためには必要である。

しかし、今回のシンポジウムでは、子どもが関心を持ち自分自身の力で試す前に、親が先回りして教えたり稽古事をさせてしまうために「自分でできたる！」と思える経験が少なかったり、それを認めてくれるような親のことばによるフィードバックが乏しいために、自尊感情を持ちにくい現状が挙げられた。子どもの自尊感情と、自信を持って「自分はこうだ」と表現する力を育てていくためには、親や保育者の、子どもがいたずらや失敗を恐れずいろいろ

なことを自由に試せるような雰囲気をつくったり、「ああ、できたじゃない、その調子」というようなことばでのポジティブなフィードバックをすることが大切である。

終わりに

今回のシンポジウムでは、子どもの育ちの側面である自己コントロールについて、保育者や友達との関係の中でそれを如何に育てていくかを様々な事例を通して考えることができ、子ども一人一人が本来の姿を出しているかという視点を保育の中に取り入れていくことの大切さを感じた。実際の保育の中にそれをどのように織り込んでいくかを考えていくことが、これからの課題である。

(お茶の水女子大学大学院)